

# 柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401/044-988-0004

http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo

第 181 号

草創期の柿生  
中学校-補遺

## その2 30人の中学3年生

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

### 1947年度 柿生地区の中学3年生

市川健造	黒川	対馬 等	片平
市川 裕	黒川	中山俊夫	片平
市川国光	黒川	碓井昭一	下麻生
梅沢泰治	黒川	森 義光	真福寺
越畑峰吉	黒川	森 幸雄	真福寺
立川貞雄	黒川	村上 登	早野
市川喜久夫	黒川	落合義雄	早野
鈴木政康	栗木	守谷 満	早野
飯草音吉	栗木	井上美佐子	上麻生
鈴木 昇	上麻生	井上イマ	上麻生
岡本茂夫	上麻生	小室美奈子	上麻生
佐藤太一	片平	天方美代子	上麻生
小野晃治	片平	中山富士江	片平
神藤幸雄	片平	杉本絹江	早野
中山吉弘	片平	矢元トミヨ	早野

提供 土方工作様

柿生国民学校高等科を卒業した若者たちのうち、3年生として生田中学校に進学した30名の氏名と居住地は右表の通りです。今年度で91歳になられる皆様ですから、さすがに存命でお元気な方は少なくなっていますが、土方工作様の同窓生名簿を頼りに、史料館メンバーの協力を得て全員の出身地を特定することが出来ました。それによると黒川7名(男子のみ)、片平7名(男子6名、女子1名)、上麻生6名(男子2名、女子4名)、早野5名(男子3名、女子2名)、栗木2名(男子のみ)、真福寺2名(男子のみ)、下麻生1名(男子)と7地域からの進学が確認できます。王禅寺、五力田、古沢、万福寺、岡上からの進学者はありませんでした。

進学した生徒は、男子が23名、女子が7名。女子の比率は男子の25%以下でした。30名と共に生田中学校に進学した3年生は、総勢98名ですが、生田中学に残る記録から、98名の卒業生は、男子55名、女子43名であったことが確認できます。柿生からの通学生を除く3年生は、生田国民学校と稲田国民学校からの進学者ですから、土方さんのように、生田国民学校西生田分校出身者を除けば(西生田駅—現よみうりランド前駅—からの電車通学)、ほとんどの生徒が徒歩通学です。そのためかこの2校からの進学者は男子が32名、女子が36名とやや女子生徒の方が多のです。

柿生地域からの進学者は、全員が小田急線柿生駅から当時の東生田駅(現生田駅)まで西生田駅をはさんで2駅の電車通学(百合ヶ丘駅の開業は昭和35年、新百合ヶ丘駅の開業は昭和49年)です。朝晩のラッシュ時でも2両編成の電車が1時間に2本しかないのです。細山の土方工作様は、『生田中学校創立40周年記念誌』に、「今のように通路になっていないむき出しの連結器にまで人が乗っていた。」と記されています。それほど混雑がはなはだしく、私がお話を伺うことのできた井上美佐子様と中山富士江様は、「ともかくもの凄い混雑で、西生田駅で中の方に押し込められてしまうと、降りられなくなってしまったので、毎日必死だった。特に厚着になる冬場は大変だった。」と口々に電車通学の苦痛を語ってくれました。女に教育は必要ないと考える母親や女性親族が多かった時代ですが、高等科を卒業した生徒たちであることを勘案すると、女の子に超満員の電車通学などさせられないと考える親が大勢だった結果が、柿生からの女子生徒の進学者が少ない結果につながったように思われます。

『生田中学校創立60周年記念誌』には、創設当初の廃墟のような校舎の貴重な写真が掲載されています。この建物の床に蓆を敷き、ミカン箱を机代わりにした座学が時々行われたのだそうです。 続く

(「臼井義胤翁を訪ねて」は9月号(183号)より再開します)



開校当時の校舎



シリーズ  
麻生区の地名 その6

万福寺の地名

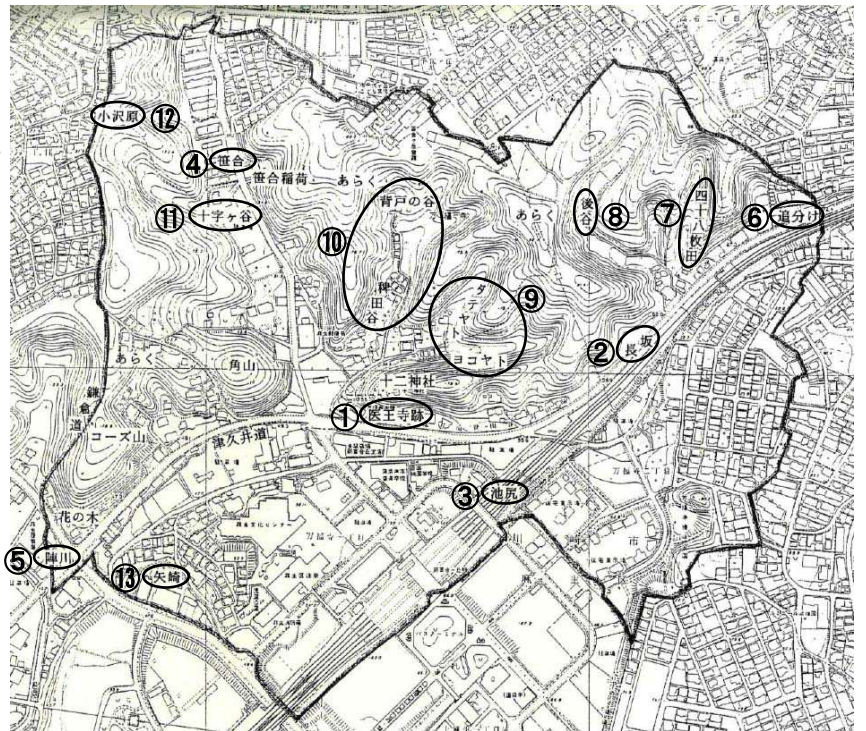
菊地恒雄(日本地名研究所 研究員)

小田急線に新百合ヶ丘駅はありますが、新百合ヶ丘の町名はありません。麻生区役所のある場所は万福寺です。

万福寺の町名で一番に気になることは、地域内に万福寺という寺がないことで、寺もないのになぜ万福寺という地名が付いたのかということです。

万福寺の名は、永禄 2 年(1559)の『小田原所領役帳』に「小机万福寺 10 貫 500 文 田中」と記されるのが初めてで、中世後期には万福寺の地名が存在していたことは確かです。しかし、寺も同時に存在したことを知る資料がないので確かめようがなく、推測の域をでないのです。

十二神社のある丘の下に医王寺がありました(右図①)。新義真言宗の寺で、稲城市坂浜にある高勝寺の末で山号を金栄山といました。明治初年に廃寺となったとありますから、長く無住であったため



『川崎地名辞典(下)』の万福寺村より

新政府の無住の寺の政策に則り廃寺となりました。室町後期の作と言われる薬師如来像や江戸期の日光・月光像、十二神将像は医王寺跡地に建つ、旧万福寺会館に保存されていました。現在もそれら仏像は大切に保存されています。その仏像の存在から、万福寺は医王寺の前身とも考えられます。

『川崎地名考』万福寺の項に、医王寺について、江戸後期の『風土記稿』では片平村の熊野社が万福寺村医王寺持とあり、正徳 5 年(1715)の『上麻生村明細帳』(鈴木家文書)に上麻生村の字山口にあった白山社、山王社、神明社は支配万福寺村医王寺とあり、その後上麻生村持管理に変更されています。

万福寺には明治初期に付けられた字名が万福寺全域に第一号という一つの字のみです。村域が狭いということかと思えます。したがって、一般には使用されることがなく、土地台帳のみの字名です。

そこで、地元では江戸時代の小名(こな=小字)と通称地名で呼びあっていました。

小名長坂②は津久井道の高石方面からの長い坂の周辺の地名で、坂下から高石までの曲りくねった長い坂は苦勞したことでしょう。その坂下には丘陵部の小河川がこの辺で合流し形成したと思われる池があり、新百合ヶ丘駅の新宿寄りの一帯を小名池尻③と呼びました。麻生郵便局から千代ヶ丘 4 丁目に至る谷戸の地域を小名笹合(ささご)④と呼び、高石村の高石山法雲寺を開いたとされる笹子姫が最初に住んだ地に因むという説話があります。平尾と金程から流れてくる麻生川上流部を地元では陣川(じんがわ)と言います。その呼び方が転じて麻生警察署周辺を小名神川(じんがわ)⑤があります。

次に小名と通称地名の関係を記します。小名長坂の上部に、旧津久井道と旧王禅寺道が分岐している付近が「追分⑥」です。長坂の途中の小さな棚田がたくさん連なるところから「四十八枚田⑦」、その奥の谷戸が「後谷(うしろやと)⑧」。長坂を下った津久井道沿いの崖下(十二神社のある地層)から浸みだした湧水でできた池がかつてあって弁天が祀られており、その周辺を「弁天前(べんてんめえ)」と言います。

小名池尻付近の医王寺前を「堂の前」、医王寺から入る谷戸を「堂の入(どうのいり)」と言います。イリは谷戸の奥という意味です。十二神社の裏には複数の谷戸があり、「ヨコヤト」「タテヤト」⑨や「稗田谷(へーだやと)」「背戸の谷(せどのやと)」⑩の地名が伝えられています。

小名笹合の谷戸を横切るような形で「十字ヶ谷(じゅうじがやと)⑪」があり、その尾根上が小沢原合戦の古戦場跡と伝えられる「小沢原⑫」があり、その尾根道に「鎌倉道」という古道跡があります。

小名神川付近には「角山(かどやま)」「コース山」があり、古沢境の山を「花の木」と言います。このハナは端のことで、山の先端のことです。また、この付近に「すりこぼち」という地名があり、窪地の意味かと思えます。「矢崎⑬」のヤは湿地のことで、サキは前の意で、陣川沿いの湿地の前という意味でしょう。

しかし、これらの地名も区画整理で新しい町となり、地形から確認できる場所は少ないです。

シリーズ  
教育の歩み 番外編

## ゆとりの教育をめぐって (7)

小林 基男 (柿生郷土史料館専門委員)

2002年に施行された教育課程表は、土曜日を休校日とした授業五日制を踏まえた授業時数の削減ありきで、週当たりの授業時数を減らした上に、「総合的な学習の時間」を選択科目と合わせて3年間で14時間分設けていました。しかも鳴り物入りで設けられた「総合的な学習の時間」は拙速な導入の結果として、予期した成果を産み出せなかったのです。「ゆとりの教育」は、考えを深める思索の時間を十分にとり、自ら考えて構想を練り、行動に移せる人材を育てることを狙いとして構想されたのです。狙いは良かったのですが、そのための工夫は何もないに等しかったのです。それでは宝の持ち腐れです。そのため各方面から上がる、学力低下を不安視する声に抵抗できなくなったのは当然です。実際に21世紀に入ってから国語力の低下が著しいことは、あちこちで指摘されている通りです。

日本の子どもたちは、年齢が上がると共に、人前で話すことを嫌う傾向が強く、大学の講義や演習でも活発に質疑応答が行われることは稀です。そのため21世紀に入るところから、90分の授業の最後に10～15分の時間をとって、その日の授業の感想と質問を書いてもらい、翌週の授業の最初に教員からの回答をプリントして配る「リアクションペーパー」システムが次第に普及することになりました。ワープロやパソコンの普及が可能にしたシステムです。授業の場では発言する勇気が出なくても、みんなには何を聞いたかわからないで済む、紙での質問なら出来るのです。こうすると学生との対話が可能になるのです。

大学教育は、少数の専任教員と多数の非常勤教員で成り立っていますから、私もご多聞に漏れずいくつかの大学に非常勤講師として出講し、その都度リアクションペーパーを書いてもらいました。学生の文章を眼にして刮目したのは、自分の思うことを文章として表現する能力が落ちているという、隠しようのない事実でした。かつて「読み書きソロバンぐらいいは…」と言われた通り、学力の基礎は、読解力と表現力そして計算力にあります。文章を読む訓練には、それなりに時間がかかります。長期休暇に長編小説を最低1冊は読みこみ、その要約や感想を文章にすると上達は早いです。しかし、今の若いご両親に伺うと、小中学生の多くは、テレビアニメでさえ、10分程度の短編ならともかく、30分番組やそれ以上になると、録画して早送りしながら見たい画面だけ見て終わりにするそうです。長いものを読んだり見たりする忍耐力がそもそもないのだと…。

もちろんそうした訓練の行き届いた子どもたちが、一部にはしっかり存在しています。ですが、以前に指摘した通り、国家や社会、或いは学校や地域といった集団のレベルは、その集団の7割から8割を占める普通の人たち、即ち中間層のレベル(教育を受ける世代では学力)が奈辺にあるかで決まります。早送りで見ただけにしたり、分かったことにしたりする子どもたちの大量出現は、大きな問題であり、教育課程の見直しの必要を我々に迫っていることは確かです。しかしその方向は、前回(第6回)の最後に表を載せた2021年完全施行の教育課程表のように、国・社・数・理・英の5教科の授業数を増やし、選択科目と総合的な学習の時間を減らすことで達せられるものではありません。授業数を増やし、教科書を厚くしたところで、過去の成功体験にこだわって、かつての詰め込み方式に戻るのでは、30年を経過してなお抜け出せない日本社会の停滞とじり貧体質を過去のものとするために必要な人材を育てられないことは明らかです。

繰り返しになりますが、いま求められているのは、知識の詰め込み教育に象徴される受動的学力ではなく、創意工夫する力と自ら思索し深く考える力を養う主体的学力を育てることなのです。5教科の授業時間は、確かに1単位時間(35週分)増えました。しかしその分教科書が厚くなったのでは、教科書を読んで書かれている内容を簡単に解説して先に進む、試験の時に覚えればそれで済んでしまう旧態依然とした教室風景に戻るだけです。求められているのは、教科書の字面をなぞるのではなく、教科書に書かれた文章の背景にどのようなことがあるのか、どんなことが積み重なった結果として、教科書の表記となったのかを、生徒と共に解き明かすことです。「ああそうなのか」と目から鱗が落ちるような感動が生まれるとき、考えること、思索することの楽しさが自覚できた時、生徒たちの学習意欲は高まり、探求心が大きく高まるのが期待できるのです。受動的学力ではなく、能動的学力の涵養が可能となるのです。各教科の取り組みが、教科書の紙背を読み込む授業への転換で足並みが揃うと、教科別の授業で別個に学んだことに横串を通す狙いを持った「総合的な学習の時間」の狙いもまた生きてくることとなります。知識は覚えることに意味があるのではなく、活かして使うことに意味があるのです。学んだ知識を活かして使うことで見える景色にこそ意味があるのです。その実践の場として大きな意味を持つ「総合的な学習の時間」は減らすべきではなく、より充実させるべき時間なのです。

続く



柿生・岡上の  
地域文化財

王禅寺(3) 志村家文書

～『王禅寺村 御用留記帳』について～

志村家に残された古文書は江戸時代中期から後期の王禅寺村の様子が見られる資料で、川崎市の地域文化財(有形文化財)に登録されていますが、今回その中で当史料館から刊行された『御用留記帳』(右上図)についてご紹介いたします。

本書『王禅寺村 御用留記帳』は、王禅寺村の名主、志村文之丞が役目柄書き留めた、主として公文書の写しです。村の領主である増上寺の地方役所からの通達、関東取締り出役など、お上からの通達や返書、村からのお願いなどの文書の内、文久2年と3年を合わせた2年分の記録です。全部で180ページに及ぶ文書の原文の写真版を上段に、読み解いた釈文を下段に置く構成で編集したものです。全体の構成は、前書きと凡例が2ページ、続いて本文が180ページ、資料と索引が9ページ、後書き等が1ページの192ページからなっています。

幕末の公文書の釈文ですから、釈文もまた漢文を読む調子で、自ら白文のどこに訓点を置くかを考えながら読み進めていく必要がありますが、王禅寺村に残された幕末の貴重な史料です。開国だ、攘夷だ、尊王だ、佐幕だといった世相騒然とする混沌とした世情が、麻生郷の小さな村までも、さまざまに揺さぶっていた有様を味わって頂けるものと思います。

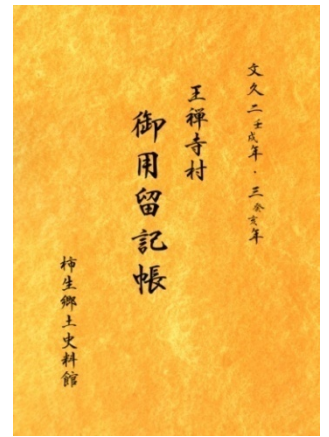
何も順を追って、最初から読む必要はありません。以下に読み方を例示し参考に供します。

\* \* \*

1. 巻末の186～187頁が年表になっています(右中図)。左側が歴史年表を抜粋した国内の出来事、右側が御用留の記事です。中央の太い線に沿って頁とあるのは、本書の何頁かを示しています。対照しますと文久2年(1862年)1月15日に坂下門外の変が起きたこと。その日のうちに事実の知らせと狼藉者が百姓・町人などに姿を変えて逃げているので、怪しき者に用心し、見かけ次第通報するようにとの、関東取締り出役からの急ぎの廻文が届いているのが分かります(4頁)。同年12月28日には、将軍家茂が軍艦で上洛の御触れが出され、すぐに王禅寺村にも、村々や宿駅の疲弊を配慮して、軍艦で上京するので安堵せよと知らせている(43頁)といった具合です(ただしこの御触れは実現しません)。興味のある所からご覧ください。

2. その際、助詞は小さく入っていますし、読みにくいのですが、前書きの続きの凡例の(6)に助詞の読みをまとめておきましたので、ここをご覧ください。

3. 江戸時代は身分制が厳しく規定された社会です。身分の上下にはことのほかうるさいのです。そのため、増上寺や幕府からの通達は、通達の送り主である増上寺や関東取締り出役の方が、村の名主や百姓代といった村役人より身分が上ですから、通達の出し手側の名が上に、受け手である名主などの名が下に書かれます。宛先を上を書くというルールはまだないのです。うっかりすると出し手と受け手を間違えてしまうので、内容で判断することが重要です(例:58頁の文書、右下図)。なお、同じ理屈は村内にも当てはまり、名主や百姓代ら村役人が村人に出す通知では、出し手である村役員の名が上に書かれます。



年表  
文久2年(1862年)・文久3年(1863年)

日付	国内のできごと	頁	御用留記事
2年			
1/1	文久遣欧使節長崎出航。仏、英、蘭、プロシア、露、ポルトガル歴訪。開港延期交渉等を行う。		
1/15	坂下門外の変。老中安藤信正、坂下門外で水戸浪士等の襲撃を受け負傷する。浪士6人斬殺される。	4	今朝、和田倉門辺にて重き役人へ乱妨する者あり。桔梗門辺にて安藤対馬守、怪我を負う。
		7	百姓代に小左衛門・利右衛門・茂右衛門がなる。
		7	鉄炮拝借願、2月6日に借りる。
2/11	将軍家茂と皇妹和宮の婚儀が江戸城にて挙行。	12	和宮様、入口より御台様と称し奉る。

御上洛来ル十三日 御登駕、東海道筋  
通御可被遊旨被仰出候ニ付、人馬多く入候処、神  
奈川宿并定加助助三而者、馬数不足いたし候ニ付、  
前後宿方江も天々申談候得共、何分も引足兼  
至然差支等相成候而者不相済義之処、其方共  
村々馬多分持居候趣ニ付、右宿役人并助郷  
惣代共其相当之賃錢を以雇付方可申談候間  
前書御用柄之次第厚相弁弁、所持馬之分  
差出し、無差支様可取計候、此廻状昼夜不  
刻付を以継立、留り村方可相返もの也

会所  
神奈川

亥ノ二月十一日  
亥中刻

武州都築郡  
王禅寺村  
麻生村  
能ヶ谷村  
右最寄  
村々名主  
年寄

(柿生郷土史料館)

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日：6月10・17・24日(毎土曜日) 7月2・9・16・23日(毎日曜日)  
◎開館時間：午前10時～午後3時

第87回  
カルチャーセミナー

柿生の名品「禅寺丸柿」の歴史

日時：7月16日(日) 13時30分～15時30分  
講師：相澤 雅雄氏(地域史研究家)  
会場：柿生郷土史料館特別展示室(予定)

禅寺丸柿の栽培法から江戸への出荷のあれこれ、愛知県枇杷島市場への出荷に関する新出史料が語ることなど、お話いただきます。